

ロシア語における数詞を含む分割文について Коммуникативно расчлененные предложения с числительными в русском языке

井上 幸義
Yukiyoshi Inoue

В настоящей статье рассматривается вопрос о степени допустимости употребления коммуникативно расчлененных предложений с числительными «один», «два», «три» и «четыре». В допустимом варианте предложения «Книг было три» вынесенное в начало имя существительное в родительном падеже множественного числа является субъектом и служит темой, а числительное «три» - ремой. Также является допустимым предложение «Этих карандашей я купил два» с вынесенным в начало объектом. В то же время правильность построения предложения «Учебных предметов он любил два» аналогичной конструкции, характеризующейся вынесенным в начало объектом, вызывает большие сомнения.

Для изучения возможных факторов, определяющих степень допустимости употребления расчлененных предложений, было проведено анкетирование. По результатам анализа анкет можно сделать предположение, что чем более четко выражено отъединение той части предметов, обозначенной числительным, от совокупности предметов, обозначенной существительным, тем выше степень допустимости употребления таких предложений. Другими словами, чем сильнее актуализация обоих членов, т.е. и существительного, и числительного, тем более допустимо высказывание. А чем больше постоянства состояния, выраженного сказуемым, тем оно в меньшей степени допустимо.

0. はじめに

現代ロシア語では、数詞句をともなう存在文は、例えば、
Было три книги. 「3冊の本があった」(книгиは単数生格形)

というように伝達上の不分割文 (коммуникативно нерасчлененное предложение) で表される。それに対し、「本」がテーマとなる場合は、日本語の数量詞遊離文^①と同様に「本」が文頭に置かれ数詞が後置され、

Книг было три. 「本は 3 冊あった」 (книг は複数生格形)

という伝達上の分割文 (коммуникативно расчлененное предложение) が構成される。

これら複数生格名詞+数詞の分割文は、名詞が主体を表す場合だけでなく客体を表す場合にも適格文であることがある。

Этих книг мы купили две. 「これらの本を、私たちは 2 冊買いました」
一方、次の分割文は同様に名詞が客体を表しているが、その容認可能性は疑わしい。

?Учебных предметов он любил два. 「? 教科は、彼はふたつ好きだった」

これら例文の容認可能性の程度の違いは何に起因しているのであろう。現代ロシア語の数詞句を含む分割文に関する研究は、わずかにアカデミア文法 80 年版 (*Русская грамматика*, 本稿中 ПГ) に見られる程度で極めて少なく、分割文の容認可能性の程度とその要因に関しては、これまでほとんど研究されていない。本稿では、統語的レベルと意味論的レベルから、数詞 <1><2><3><4> を含む分割文の容認度とそれを決定付ける要因が何かについて考察する。

統語的問題に関して、ПГ は、「生格名詞が数詞 <1><2><3><4> との結合から分割される場合、文頭へ移された生格が複数形をとることはノーマルであり」、「生格が前置されると単数形の代わりに複数形を使うことはノーマルなことである」^②としている。

名詞の複数生格と結びつく主格/対格の数詞 <5> 以上は、分割文においても常に名詞の複数生格と結合し、また、名詞の単数生格と結びつく主格/対格の数詞 <2>、<3>、<4> も分割文では複数生格と結合しうる。しかし、名詞と性・数・格において一致する数詞 <1> が分割文で複数生格と結びつきうるかは疑問であり、本論ではこの問題も含めて考察する。

ПГ は、名詞の単数生格形の複数生格形への変換をともなうこのような分割は、数詞と名詞生格の成分の両方を顕在化 (актуализация) する目的を果たしている、と指摘している。^③両方の成分を顕在化するということは、

それぞれの成分を一体のものではなく別々のものとしてより強く認識するということである。意味論的レベルの要因として、名詞が表す対象物の類・タイプから、数詞が表す対象物の部分がより明確に分離され際立たせられるほど、分割文の容認度が高まるものと推測され、分割文の容認度は、このような意味論的なレベルと統語的なレベルの複合的な関係によって決定されるものと思われる。そこで、本稿では、まず統語的観点から、分割文を3つの文型に分類し、次に上述の要因を含めた意味論的な要因を提示する。これらの統語的・意味論的要因を考慮に入れた46の例文のアンケートを用いて、2003年9月にモスクワ、サンクト・ペテルブルク、極東・シベリア在住のインフォーマント165名に対してアンケート調査を実施した。

以下、1. 分割文における統語的要因および意味論的要因、2. アンケート調査とその分析、3. 結語の順に考察する。

1. 分割文における統語的要因および意味論的要因

以下、本稿では、分割文において数詞<1><2><3><4>が主格/対格で名詞と結合する場合についてのみ論ずる。<>で示された数字は数詞を示す。

統語的に名詞生格形+数詞（主格/対格）の形態は、3つの文型に分けることができる。すなわち、主体生格+数詞（主格）、客体生格+数詞（対格）、状況語（生格）+数詞（対格）の3つである。まず、それぞれの典型的な例文に即して、アンケートによって調査すべき点を予め検討する。次に意味論的に考えられる要因として「名詞が表す対象物の類・タイプから、数詞が表す対象物の部分が明確に分離され際立たせられる程度」および「述部の恒常的状态性」を提示する。

1.1 統語的要因（文型）

1.1.1 主体生格+数詞（主格）（自動詞構文）

(1) 人称代名詞（複数生格）+集合数詞・個数詞（主格）

例：Нас двое。「我々はふたりです」（集合数詞）

Нас два。「我々はふたりです」（個数詞）

(2) 可算名詞（複数生格）+数詞（主格）

例：Пассажи^{ров} осталось в автобусе три。「乗客は、バスに3人残った」

Дач у него две. 「別荘を、彼はふたつ持っている」

(3) 可算名詞 (単数生格) + 数詞 (主格)

例: Пассажира осталось в автобусе три. 「乗客は、バスに 3 人残った」

シェリャーキン (Шелякин) によれば、これらの自動詞構文は、主体の数量が特定量存在すること、あるいは到着・出現・集積の結果として存在することを特徴付けるものである。^④従って、使われる述語動詞は、存在の動詞の他、到着・出現・集積を表す動詞が考えられる。不分割文では、数詞 < 1 > は名詞の性・数・格に一致し、数詞 < 2 > < 3 > < 4 > は名詞の単数生格形と結びつくが、分割文では、名詞の単数生格より複数生格形と結びつきやすいかどうか、複数生格形 + 数詞 < 1 > は容認文となりうるのか、また人称代名詞複数形は集合数詞とのみ結合すると言われるが、実際にそうであるかを調査する。

1.1.2 客体生格 + 数詞 (対格) (他動詞構文)

(1) 可算名詞 (複数生格) + 数詞 (対格)

例: Книг он прочитал две. 「本を、彼は 2 冊読み通した」

(2) 不可算名詞 (単数生格) + 数詞 (対格) + 助数詞 (numeralive)

例: Пива он выпил три бутылки. 「ビールを、彼は 3 本飲んだ」

不可算名詞は、可算名詞に比べ類・タイプの意味が強く、これと結びつく助数詞は類から部分 (数量) が明確に個別化されることを表す。(2) タイプの文と (1) タイプの文ではどちらが容認度が高いか、また 1.1.2 の客体生格と 1.1.1 の主体生格とではどちらが優位性が高いかを調査する。日本語の数量詞遊離文では、いくつかの研究で主語・直接目的語・間接目的語? の順で優位性が認められていることが報告されている。^⑤

1.1.3 状況語 (生格) + 数詞 (対格) (動詞 + 状況語構文)

・ 単位を表す名詞 (複数生格形) + 数詞

例: *Рублей это стоит три. 「*ルーブル、それは 3 する」

この文は非文と考えられる。この文に対応する適格文、

Это стоит три рубля. 「それは 3 ルーブルする」

では、単位を表す три рубля (対格数詞 + 単数生格名詞) は動詞 стоять の

直接補語ではなく、数量の特徴付けをする、程度の状況語であり、動詞に対する情報補完的な、強い付加 (сильное примыкание) の関係を成す。この関係は、ひとつの存在が別の存在に対して行なう行為ではなく、ふたつの存在間の関係という状態を表すものなので他動性は低い。このような単位を表す程度の状況語を含む分割文が容認不可能であるかを検証する。

次に、分割文の容認度に関係すると考えられる2つの意味論的要因を提示する。

1.2 意味論的要因

1.2.1 名詞が表す対象物の類・タイプから、数詞が表す対象物の部分が明確に分離され際立たせられる程度

ヤコブソン (Якобсон) は、ロシア語の生格は、常に、生格によって意味される対象が発話の内容に参加する限界を表しており、その対象が発話の内容から除外されるか、あるいは部分的にだけ提示されることを示している、と記している。^⑥また、シャーフマトフ (Шахматов) は、<5>から始まる数詞の名称は、共通スラブ祖語では名詞であり、実体 (субстанция) として考え得る総体を意味していた、と述べている。^⑦

<5>以上は、古代ロシア語では数名詞であり、主格/対格を含めたすべての格で名詞の複数生格形と結びついた。すなわち、この結合形態は、まず名詞が表す対象物が同質・同類であることが認識され、その後に「それら」の数が認識されるという、反線状的で非一体的・非一括的な2段階の認識が反映されたものと考えられる。原理的に、数詞と関係づけられる名詞の複数生格という形態は、数詞が表す対象物の数と名詞が表す対象物が非一括的・非一体的に分離されて認識されることを示している、と推論することができる。^⑧それに対し、<1>から<4>までは、古代ロシア語では数形容詞であり、名詞とは一致によって結合した。この結合形態は、名詞の特徴としての数と、名詞が表す対象物とが、分離されずに線状的に認識されるという、一体的・一括的な認識が反映されたものと考えられる。分割文において、数詞<2><3><4>が名詞の複数生格形と関係づけられるという現象にも、<5>以上の場合と同様の非一体的・非一括的で分離された認識の本来的な類像性が反映されていると推論される。

この生格の分離提示機能によって、名詞が表す対象物の総体、類、タイプから、数詞が表す対象物の特定数量という部分が明確に分離され際立たせられることが示されれば、分割文の容認度が高まると思われる。

分離が際立たせられるケースは、主体が人称代名詞のとき（つまり、指し示す名詞がすでに特定されていることが表されている）、名詞の特定性が高いとき、強勢の助詞 *только* 「だけ」などによって数量が強調されるとき、助数詞が使われているときなどが考えられる。日本語の数量詞遊離のいくつかの研究でも、「だけ」、「も」、「しか」、「とも」のような強調の副詞がつくと容認度が高まることが報告されている。^⑨

また、他動性の高い完了体動詞は、対象物に与える変化や働きかけが強いため、分割文では対象物の特定数量という部分を明確に分離し際立たせると考えられる。

不可算名詞は、可算名詞に比べ類・タイプの意味が強く、分割文では、数詞+助数詞で表される数量はその類・タイプから強く分離され、数詞と名詞生格の成分の両方が強く顕在化されると考えられる。また、授受・売買・飲食を表す完了体他動詞が補語として不可算名詞あるいは可算名詞の生格をとると、その動作は、その名詞の全体でない一部分、一定量に及ぶことを表すこととなり（いわゆる部分生格）、やはり数詞と名詞生格の成分の両方が強く顕在化され、容認度が高まると考えられる。

例：Аспирина он принял две таблетки. 「アスピリン（単数生格）を、彼は2錠服用した」

それに対し、これらに対応する不完了体他動詞が対格補語をとると、その動作は当該の名詞が表す対象全体に及ぶ。

1.2.2 述部の恒常的状态性

日本語の数量詞遊離文に関して、大木充は、述部が表している恒常的状态性が高いほど、主語名詞句の総記性は高く、主語名詞句から数量詞遊離がおこなわれると、文の容認可能性が下がる、と指摘し、次の例文を挙げている。^⑩

*B 棟の住人は8人高校の先生だ。

この例文では、述部は存在ではなく高い恒常的状态性を表しているため主語名詞句の「B 棟の住人」は「全員」を指すことになり、それに対して

遊離数量詞 8 人はこの名詞句のさす全体ではなく部分数量を表すことになり矛盾が生じている。

ロシア語でも、以下の文は容認度が低いと考えられる。

?Учебных предметов он любил два. 「?教科は、彼はふたつ好きだった」この場合、不完了体他動詞 любил 「好きだった」は一定期間の心理的状态を示しているので учебных предметов 「教科」は全教科を表していることになり、「ふたつ」とは矛盾する。ただし、учебных предметов を из учебных предметов 「教科のうち」と限定句に代えると、「教科」の部分量を表すことになり容認度は高まると推測される。

2. アンケート調査とその分析

2.1 アンケート調査方法

以上の統語的要因および意味論的要因を考慮してアンケートを作成し、調査を行なった。アンケートの例文は、PG 中の例文や、ブルガーコフ、プーニン、オレーシャなどの文学作品中の文を加工したもの、新たに作り出したものなどである。

アンケート調査は、2003 年 9 月、モスクワ、サンクト・ペテルブルク、ヴラジオストーク、ペトロパヴロフスク・カムチャツキー、ハバロフスク、ノーヴァヤ・イギルマ、ケメロヴォ、ヴラジオストークに在住のインフォーマント 165 名に対して行なった。インフォーマントの性別、年齢層、教育、居住地、民族ごとの人数・比率、容認度平均値については、2.2.2 「アンケート回答者データおよびデータ別容認度」中の表「回答者データ別容認度」を参照。回答は、46 の例文の容認度を以下の 5 段階で評価する方式を採った。

1. 全く容認できない文、2. 極めて疑わしい文、3. わからない、
4. 少し疑わしいが容認できる文、5. 完全に容認できる文

アンケートのタイトルは、Анкета о допустимости употребления некоторых предложений в разговорной речи русского языка (ロシア語の会話体における文の使用の容認度に関するアンケート) である (資料参照)。

2.2 アンケートの分析

アンケートの結果は、表「問別容認度 (容認度順)」にまとめた。この

8 井上 幸義

問別容認度（容認度順）

問番号	回答数	容認度別回答数					平均値	比率 (容認度4+5)
		1	2	3	4	5		
問7	164	0	3	0	2	<u>159</u>	4.93	98.2%
問17	164	0	3	0	<u>14</u>	<u>147</u>	4.86	98.2%
問19	163	6	4	1	<u>21</u>	<u>131</u>	4.64	93.3%
問29	164	6	2	1	<u>37</u>	<u>118</u>	4.58	94.5%
問31	165	4	11	3	<u>46</u>	<u>101</u>	4.39	89.1%
問45	163	13	8	5	<u>37</u>	<u>100</u>	4.25	84.0%
問34	165	15	11	4	<u>41</u>	<u>94</u>	4.14	81.8%
問11	164	12	12	6	<u>49</u>	<u>85</u>	4.12	81.7%
問10	164	21	12	4	<u>45</u>	<u>82</u>	3.95	77.4%
問32	165	21	18	3	<u>64</u>	<u>59</u>	3.74	74.5%
問24	163	22	29	5	<u>48</u>	<u>59</u>	3.57	65.6%
問22	164	28	24	4	<u>45</u>	<u>63</u>	3.56	65.9%
問26	164	27	26	3	<u>48</u>	<u>60</u>	3.54	65.9%
問28	164	25	25	8	<u>52</u>	<u>54</u>	3.52	64.6%
問36	165	27	27	6	<u>52</u>	<u>53</u>	3.47	63.6%
問46	165	26	31	8	<u>55</u>	<u>45</u>	3.38	60.6%
問21	164	39	18	6	<u>51</u>	<u>50</u>	3.34	61.6%
問44	165	33	27	12	<u>47</u>	<u>46</u>	3.28	56.4%
問20	164	32	33	8	<u>49</u>	<u>42</u>	3.22	55.5%
問25	163	40	28	6	<u>47</u>	<u>42</u>	3.14	54.6%
問43	165	32	35	9	<u>57</u>	<u>32</u>	3.13	53.9%
問27	164	<u>39</u>	31	5	<u>54</u>	<u>35</u>	3.09	54.3%
問30	164	33	<u>40</u>	9	<u>57</u>	<u>25</u>	3.01	50.0%
問37	164	<u>44</u>	30	3	<u>55</u>	<u>32</u>	3.01	53.0%
問15	163	<u>47</u>	35	5	<u>46</u>	<u>30</u>	2.86	46.6%
問23	163	<u>64</u>	19	7	26	<u>47</u>	2.83	44.8%
問1	165	<u>48</u>	43	2	<u>55</u>	<u>17</u>	2.7	43.6%
問13	164	<u>50</u>	41	7	<u>43</u>	<u>23</u>	2.68	40.2%
問35	165	<u>50</u>	<u>44</u>	6	<u>44</u>	<u>21</u>	2.65	39.4%
問14	164	<u>51</u>	<u>44</u>	6	39	<u>24</u>	2.64	38.4%
問6	161	<u>65</u>	31	12	<u>38</u>	<u>15</u>	2.42	32.9%
問41	165	<u>67</u>	<u>33</u>	11	<u>43</u>	<u>11</u>	2.38	32.7%
問33	165	<u>64</u>	40	11	<u>41</u>	<u>9</u>	2.34	30.3%
問12	164	<u>78</u>	34	7	<u>39</u>	<u>6</u>	2.15	27.4%
問3	165	<u>88</u>	<u>34</u>	6	28	<u>9</u>	2.01	22.4%
問42	165	<u>86</u>	<u>36</u>	7	31	<u>5</u>	1.99	21.8%
問16	161	<u>96</u>	<u>25</u>	3	23	<u>14</u>	1.97	23.0%
問4	162	<u>91</u>	<u>33</u>	8	24	<u>6</u>	1.9	18.5%
問2	165	<u>95</u>	<u>36</u>	5	23	<u>6</u>	1.84	17.6%
問5	162	<u>96</u>	<u>33</u>	5	22	<u>6</u>	1.82	17.3%
問40	165	<u>109</u>	<u>29</u>	4	20	<u>3</u>	1.66	13.9%
問39	165	<u>111</u>	<u>33</u>	4	14	<u>3</u>	1.58	10.3%
問9	163	<u>107</u>	<u>37</u>	3	14	<u>2</u>	1.57	9.8%
問18	163	<u>115</u>	<u>29</u>	7	11	<u>1</u>	1.49	7.4%
問8	164	<u>125</u>	<u>24</u>	0	13	<u>2</u>	1.43	9.1%
問38	165	<u>130</u>	<u>26</u>	4	3	<u>2</u>	1.31	3.0%

表には、問番号、回答数、容認度別回答数、容認度平均値、容認度 4 と 5 の合計（少し疑わしいも含めた容認可能文）の比率を示し、容認度平均値の高い方から低い方へ順に問番号を並べた。容認度別回答数の欄には、容認度 1 から 5 までの各回答数を記入し、各問で 1 番目と 2 番目に多かった回答数をどちらもボールド体と下線で表示した。これにより、容認度への回答の偏りが視覚的に識別される。この表に基き各例文の容認度の分析を行なった。

容認度第 1 位は問 7 で、平均値 4.93、容認度 4 と 5 の合計の比率 98.2% であった。第 1 位の問 7 から第 20 位の問 25（平均値 3.14、比率 54.6%）までは、各問の 1・2 番目の回答数がいずれも容認度 4 と 5 に集中している。第 21 位の問 43 から第 34 位の問 12 まではほぼ容認度 1 と 4 あるいは 2 と 4 というようにばらつきが見られる。第 35 位の問 3 から第 46 位の問 38 までは容認度はすべて 1 と 2 に偏っている。

分析に先立ち、全 46 例文を、まず形式と内容で互いに関連する合計 11 のグループにまとめ、各グループ内の例文を容認度平均値の高い順に並べた。各グループの最初の例文の容認度平均値の高い順に 11 のグループを配置した。基本的に各例文を、次のふたつのパラメータをもとに分析した。1) 名詞が表す対象物の類・タイプから、数詞が表す対象物の部分（特定数量）が明確に分離され際立たせられる程度（以下、特定数量の分離度と表記。分離度が大きいほど容認度は大か）、2) 述部の恒常的状态性（以下、述部の状態性と表記。低いほど容認度は大か）。例文の右側のカッコ内の数字、例えば (4.93/98.2%) は、それぞれ容認度平均値 4.93 / 容認度 4 と 5 の合計の比率 98.2% を表す。

2.2.1 グループ別容認度

グループ 1：人称代名詞複数生格形＋数詞（集合数詞）

問 7. Нас двое. 「我々はふたりです」 (4.93/98.2%)

問 17. Их осталось в автобусе трое. 「彼らは、バスに 3 人残った」 (4.86/98.2%)

問 19. Их приехало в Москву трое. 「彼らは、モスクワに 3 人やって来た」 (4.64/93.3%)

問 18. Их работает здесь три. 「彼らは、ここで 3 人働いている」 (1.49/7.4%)

問 8. Нас два. 「我々はふたりです」 (1.43/9.1%)

アンケート 46 例文の中で、上記問 7、17、19 (いずれも十集合数詞) が一番高い容認度を示した。

上記 5 例文のいずれも、特定数量の分離度は高く、述部の状態性は問 18 以外は低い。

人称代名詞は集合数詞と結合すると適格文となり、存在、到着、集積いずれの動詞とも結合しうるのに対し、個数詞と結合すると不適格文になる、といえる。

人称代名詞の複数形は、それを受ける名詞が複数形であることを予め明示しているために、人称代名詞によって示される名詞がその名詞の総体、類、タイプから、(ひとつひとつのばらばらな個体としてではなく) ひとつの集合体の塊としてすでに分離されていることを意味している。集合数詞が使われるのはそのためと考えられる。その結果、数詞で示される特定数量と主体とがはっきり分離されていることが強く示され、分割文の容認度が高くなると思われる。

グループ 2: 不可算名詞 (単数生格) + 数詞 (対格) + 助数詞

問 29. Пива он выпил три бутылки. 「ビールを、彼は 3 本飲んだ」 (4.58/94.52%)

問 31. Аспирина он принял две таблетки. 「アスピリンを、彼は 2 錠服用した」 (4.39/89.1%)

問 32. Таблеток аспирина он принял две. 「アスピリンの錠剤を、彼は 2 服用した」 (3.74/74.5%)

問 30. Бутылоч пива он выпил три. 「ビールビンを、彼は 3 飲んだ」 (3.01/ 50.0%)

上記 4 例文のいずれも、特定数量の分離度は高く、述部の状態性も低い。不可算名詞 (単数生格) + 数詞 (対格) + 助数詞のヴァリエーションの方が、助数詞 + 不可算名詞 (単数生格) + 数詞 (対格) のヴァリエーションより容認度が高い。

不可算名詞は、可算名詞に比べ類・タイプの意味が強く、分割文では数詞 + 助数詞で表される数量がその類・タイプから強く分離され、数詞と名詞生格の成分の両方が強く顕在化されるため文の容認度が高くなると思われる。

グループ 3: 可算名詞 (複数生格) + 数詞 < 1 > (主格) (発話の段階で対象物の数量が話者に未知である場合) および可算名詞 (複数生格) + 数詞 < 2 > 以上 (主格)

問 45. (Не зная, сколько яблок осталось в ящике.) 「(箱の中りんごが何個残っているか知らずに)」

– Яблок осталось... только одно. 「りんごの残りは... ひとつだけか」
(4.25/84.0%)

問 15. Пассажиров осталось в автобусе всего три. 「乗客は、バスにわずか 3 人残った」 (2.86/46.6%)

問 1. Пассажиров в автобусе четыре. 「乗客は、バスに 4 人いる」 (2.7/43.6%)

問 14. Пассажиров осталось в автобусе три. 「乗客は、バスに 3 人残った」 (2.64/38.4%)

問 6. Декораций всего одна. 「舞台装置はたったひとつだ」 (2.42/32.9%)

問 3. Пассажиров в автобусе только один. 「乗客は、バスに 1 人だけいる」 (2.01/22.4%)

問 16. Пассажира осталось в автобусе три. 「乗客 (単数生格) は、バスに 3 人残った」 (1.97/23.0%)

問 4. Пассажиров, кроме меня и Ивана, было в автобусе только один. 「乗客は、私とイヴァン以外には、バスに 1 人だけいた」 (1.9/18.5%)

問 2. Пассажиров в автобусе один. 「乗客は、バスに 1 人いる」 (1.84/17.6%)

問 5. Пассажиров, кроме меня, было в автобусе только один. 「乗客は、私以外には、バスに 1 人だけいた」 (1.82/17.3%)

数詞 < 1 > が使われている 6 つの例文では、問 45 だけが容認度が高い適格文で、他の 5 つの例文はいずれも低い。

数詞 < 3 > と < 4 > が使われている 4 つの例文は、問 16 (主体が単数生格) 以外はすべて数詞 < 1 > の例文よりは容認度が高いが、適格文とは言えない。これら 3 例文の容認度の回答は主に 1、2、4 に集中し、容認しない者とほぼ容認する者とはっきり分かれた。これは、人を表し子音で終る男性名詞 «пассажир» (乗客) が、会話体では個数詞より集合数詞と結合し易い傾向があるからと推論できる。実際、アンケートで容認度 1 あるいは 2 を選択したインフォーマントの何人かが、個数詞 «три» «че-

тыре» の代わりに «трое» «четверо» (集合数詞) あるいは «три человека» «четыре человека» (数詞+助数詞) が使われれば、容認度 4 あるいは 5 を選択すると述べている。

問 6 は ПГ の数詞<1>の例文であるが、アンケートの結果で見ると容認度は高くない。

問 45 では、発話開始の時点で話者自身に対象物の数量が未知であるために、結果的には数詞<1>であっても特定数量の分離度は高く、述部の状態性は低い。

問 4 の例文は、実際に文学作品で使われた次の文を一部変更したものであるが、容認度はきわめて低い。

Пассажиров, кроме меня и станowego, который, впрочем, скоро слезет на разъезде, всего-навсего один, бородастый, коренастый старик - железнодорожный артельщик. (Бунин)

「乗客は、私ならびに待避駅でじきに降りることになっている郡警察分区署長以外には、たったひとり、顎鬚をはやしてがっしりした体格の老人の、鉄道の赤帽だけである」(ブーニン)

この文は、数詞<1>の後に同格の「赤帽」が説明的に加えられているために容認度が上がっているのか、あるいは通時的な変化によって現代のロシア語では使われなくなっているのか、判断はできない。今後の研究の課題としたい。

名詞の複数形が標示する対象物の複数性と、数詞<1>が標示する唯一性とは本来矛盾する。数詞<1>が分割文で使用されるのは発話の時点で話者にとってその数量が未知であり、結果的に<1>であることが判明した場合だけと考えられる。このような例は、投票用掲示板に、例えば「棄権者数：1」と表示される場合である：Воздержавшихся: 1
ここで Воздержавшихся は複数生格形。

グループ 4：前置詞 «из» + 可算名詞 (複数生格) + 数詞 (対格)

問 34. Из учебных предметов он любил два. 「教科のうち、彼はふたつが好きだった」(4.14/81.8%)

問 33. Учебных предметов он любил два. 「教科は、彼はふたつ好きだった」(2.34/30.3%)

問 34 問 33 とともに述部「好きだった」の状態性は高いので容認度は本来低いはずであるが、特定数量の分離度は、問 34 では「教科」という名詞の総体から部分が切り出されているために高く、その結果容認度も高くなったと考えられる。一方、問 33 は分離度は低く述部の状態性が高いため、容認度は低い。

グループ 5：可算名詞（複数生格）＋数詞（主格）

問 11. Дач у него две. 「別荘が、彼にはふたつある」(4.12/81.7%)

問 13. Дач он имеет две. 「別荘を、彼はふたつ持っている」(2.68/40.2%)

問 12. Дач у него есть две. 「別荘が、彼にはふたつある」(2.15/27.4%)

上記 3 例文のいずれも、特定数量の分離度は低い。問 11 と問 12 では存在を表しているので述部の状態性は低いが、問 13 は所有という状態を表しているために高く、容認度は問 11 に劣る。問 12 では、レーマである「ふたつ」が意味の中心であるのに、別荘そのものがあるかないかを問題にする存在の *быть* の現在形が使われているために、意味的に矛盾を来たしており、容認度が低い。

グループ 6：形容詞派生可算名詞（複数生格）＋名詞（主格）

問 10. Родных у нее - только сестра. 「親類は彼女には、妹だけだ」(3.95/77.4%)

問 9. Родных у нее три. 「親類は彼女には、3 人いる」(1.57/9.8%)

問 10 のレーマ「妹」が表す数はひとりであるが、この問の容認度は高い。「妹」という語は数詞 < 1 > より具象性が強いために「親類」という類からより明確に分離されていると考えられる。このことは、レーマが表す数がひとり（ひとつ）であっても数詞の < 1 > が使われなければ容認度は高くなることを示唆している。さらに、強勢の助詞 *только* が特定数量の分離度を高めている。また、述部の状態性も低い。それに対し、問 9 では、特定数量の分離度は低く、述部の状態性は低い。本来、形容詞派生名詞は集合数詞と結合するので «три» の代わりに «трое» が使われれば容認度が高くなることが推測される。

グループ 7：指示代名詞（形容詞）＋可算名詞（複数生格）＋数詞（対格）

問 24. Эгих карандашей она купила два. 「これらの鉛筆を、彼女は 2 本買っ

た」(3.57/65.6%)

問 22. Красных карандашей она купила два. 「赤鉛筆を、彼女は 2 本買った」
(3.56/65.9%)

問 21. Карандашей она купила два, а ручек – три. 「鉛筆を、彼女は 2 本、ペ
ンを 3 本買った」(3.34/61.6%)

問 20. Карандашей она купила два. 「鉛筆を、彼女は 2 本買った」(3.22/
55.5%)

問 23. Красных карандаша она купила два. 「赤鉛筆(形容詞複数生格+名
詞単数生格)を、彼女は 2 本買った」(2.83/44.8%)

上記 5 例文のいずれも、述語動詞は、売買を表す完了体他動詞のひとつ
で、その動作は、その名詞の全体でない一部分、一定量に及ぶことを表す
ため特定数量の分離度は高く、述部の状態性も低い。

問 24 の「これらの鉛筆」は「これらと同じ種類の鉛筆」という意味で「鉛
筆」より特定性が高い。問 22 の「赤鉛筆」は「鉛筆」に比べ種類からの
特定性が高い。問 21 は「鉛筆」と「ペン」が対比されているので種類対
比の特定性が高い。問 23 に対応する分割されていない適格文は、

Она купила два красных карандаша。(数詞<2>対格+形容詞複数生格+
名詞単数生格)であり、問 23 はこの文と語順が入れ替わっただけである
にもかかわらず問 22 より容認度が低い。このことは、テーマとなる名辞
部分が単数生格の場合より複数生格の場合の方が文の容認度が高いことを
示唆している。

グループ 8：可算名詞(複数生格)+数詞(対格)

問 26. Ям он вырыл три. 「穴を、彼は 3 つ掘った」(3.54/65.95%)

問 28. Книг он прочитал две. 「本を、彼は 2 冊読了した」(3.52/64.6%)

問 46. Книг он подарил Нине две. 「本を、彼はニーナに 2 冊贈った」(3.38/
60.6%)

問 44. Картин он украл из этого музея четыре. 「絵を、彼はこの美術館から
4 枚盗み出した」(3.28/56.4%)

問 25. Домов он построил два. 「家を、彼は 2 つ建てた」(3.14/54.6%)

問 43. Картин украли из этого музея четыре. 「絵が、この美術館から 4 枚盗

み出された」(3.13/53.9%)

問 27. Дверей мы покрасили две. 「ドアを、私たちは2つ塗った」(3.09/54.3%)

上記7例文はそれぞれ文の意味は異なるが、いずれも述語が他動性の高い完了体他動詞で特定数量の分離度は高く、述部の状態性も低い。問43だけが不定人称文で動作主が示されていないが、問44の容認度とほぼ同じと言える。

グループ9：可算名詞（複数生格）＋数詞（対格）

問 36. Лодок, плывущих по реке, он видел три. 「川を進むボートが、彼には3つ見えていた」(3.47/63.6%)

問 35. Фильмов он вчера смотрел два. 「映画を、彼は昨日2つ見た」(2.65/39.4%)

上記2例文のどちらも述語は他動性が低い不完了体他動詞であるが、問36は「川を進む」という定語があるために名詞の特定性が高く、特定数量の分離度も高く、述部の状態性は高くない。問35は特定数量の分離度は低く、述部の状態性は低く、容認度は問36よりずっと劣る。

グループ10：可算名詞（複数生格）＋数詞（対格）

問 37. Границ мы переехали три. 「国境を、私たちは3つ越えた」(3.01/53.0%)

問 38. Границ мы переехали через три. 「国境を、私たちは3つ越えた」(1.31/3.0%)

上記2例文は文意は同じであるが、問37が、他動性は低いが他動詞であるので容認度は中程度であるのに対し、問38は自動詞で前置詞をともなっているため全46例文中最も低い容認度を示した。

グループ11：状況語（生格）＋数詞（対格）（動詞＋状況語構文）

問 41. Километров мы прошли три. 「キロメートルを、私たちは3進んだ」(2.38/32.7%)

問 42. Килограммов ребенок весит четыре. 「キログラム、赤ん坊は目方が4ある」(1.99/21.8%)

問 40. Часов она просидела четыре. 「時間、彼女は4過した」(1.66/13.9%)

問 39. Рублей это стоит три. 「ルーブル、それは3する」(1.58/10.3%)

4 例文のいずれも名詞は単位を表す。上記の述語動詞は数詞句がなければ成り立たないが、この関係は支配 (управление) ではなく強い付加 (сильное примыкание) であり、述語動詞の他動性は極めて低い。数詞句は補語ではなく程度の状況語を成す。以上から、特定数量の分離度は極めて低い。単位を表す名詞は連続体であるため特定数量をそこから分離してイメージすることは難しい。述部の状態性は問 41 と 40 では低く、問 42 と 39 では比較的高い。4 例文とも非文と言える。

2.2.2 アンケート回答者データおよびデータ別容認度

アンケート回答者全 165 人の性、年齢、教育、居住地、民族別の人数、比率、数詞を含む分割文の問 46 の容認度平均値は、以下の表「回答者データ別容認度」の通りである。容認度平均値は、分割文という現象そのものに対するごく大まかな容認度を推測するために、全 46 問の合計許容度を、全回答者と項目別の回答者でそれぞれ単純に割ったものである。なお、居住地の「その他 (極東、シベリア)」の内訳は、ウラジオストーク (15 名)、ペトロパヴロフスク・カムチャツキー (9 名)、ハバロフスク (2 名)、ノーヴァヤ・イギルマ (20 名)、ケメロヴォ (2 名) であるが、それぞれの回答者数が少ないために、その他 (極東、シベリア) として一括した。また、民族のその他は、記入欄に記入した回答者がいなかったため不明である。

回答者データ別容認度

		人数	比率	容認度平均値
全回答者		165	100.0%	2.96
性	男性	49	29.7%	3.06
	女性	116	70.3%	2.91
年齢	19歳未満	16	9.7%	2.98
	20-29歳	62	37.6%	2.92
	30-39歳	34	20.6%	3.01
	40-49歳	19	11.5%	2.93
	50-59歳	20	12.1%	2.82
	60歳以上	14	8.5%	3.22
教育	高等・文学・語学	23	13.9%	2.78
	高等・非文学・語学	92	55.8%	2.99
	中等	50	30.3%	2.99
	中等以下	0	0.0%	—
居住地	モスクワ	43	26.1%	2.7
	ペテルブルク	74	44.8%	2.98
	その他（極東・シベリア）	48	29.1%	3.16
民族	ロシア人	152	92.1%	2.95
	その他	13	7.9%	3.01

この表から、各項目で容認度にある程度有意的とみなしうるような違いがあると考えられる。性別では、女性より男性が容認度が高い。年齢別では60歳以上がその他の年齢層より高い容認度を示しているが、この年齢層は回答者数が14名と少ないのでデータの信頼性は低い。教育別では高等・非文学・語学教育と中等教育とでは差がなく、これらは高等・非文学・語学教育より高い。居住地別では、ペテルブルクとその他（極東・シベリア）がモスクワより高く、民族ではそのほかロシア人がよりわずかに高い。各項目の人数が多くないために以上から単純に結論を導くことはできないが、概して、地方の方が首都モスクワより容認度が高い可能性があると思われる。

3. 結語

上記の11グループの容認度から、数詞を含む分割文を可能にする統語的

要素および意味論的要素には次のような優位性の階層があると言える。左側の要素は優位性が高く、右に行くほど優位性は低くなる。

(1) 統語的階層

- 1) 名辞：複数生格 > 単数生格
- 2) 名辞：主体 > 客体 > 状況語（非文）
- 3) 集合数詞 > 個数詞 <2> <3> <4> + 助数詞 > 個数詞 <2> <3> <4> > 個数詞 <1>。ただし、発話の段階で対象物の数量が話者に未知である場合は、数詞 <1> も容認度は高い。
- 4) 人称代名詞 + 集合数詞 > 不可算名詞 + 数詞 + 助数詞 > 可算名詞 + 数詞 > 単位の名詞 + 数詞（非文）（なお、可算名詞 + 数詞 + 助数詞がどこに位置するかは今後の研究課題とする）

以上の統語的階層と複合的に分割文の容認度を決定するのは、次の意味論的な階層である。

(2) 意味論的な階層

- 1) 名詞が表す対象物の類・タイプから、数詞が表す対象物の部分（特定数量）が明確に分離され際立たせられる程度：高い > 低い
（名詞の特定性：高い > 低い、強勢の助詞 *только* が使われる > 使われない、他動性：高い > 低い）
上述の統語的階層のうち特に 3) と 4) はこの意味論的な階層によって決定づけられると考えられる。
- 2) 述部の恒常的状态性：低い > 高い
（自動詞：存在および到着・出現・集積の結果としての存在を表す動詞 > 状態を表す自動詞；完了体動詞 > 完了体動詞）

注：

- ① 本論では変形（移動）を想定しない立場をとるが、日本語文法では数量詞遊離という名称は一般化しているので、日本語のこのような構文に対しては便宜上数量詞遊離文という名称を用いることにする。
- ② ПГ, С. 241, С.330

- ③ То же. С.241
- ④ Шелякин, М.А. *Справочник по русской грамматике*. М., 1993. С.258-259
- ⑤たとえば、柴谷方良・景山太郎・田守育啓『言語の構造 – 理論と分析 – 意味・統語篇』、くろしお出版、1982年、372-373頁。
 関係節化の受けやすさを表す名詞句優位性の階層（主語<直接目的語<間接目的語<副詞的目的語、左に行くほど優位性が高い）が数量詞遊離の適用可能性の規則にも働いており、英語では主語のみが、日本語では主語・直接目的語・間接目的語?の順で数量詞の遊離を許す、としている。
- ⑥ Якобсон, Р. О. К общему учению о падеже, перевод с немецкого А.А. Холодовича. - В кн.: *Избранные работы*. М., 1985. С. 146-149
- ⑦ Шахматов, А.А. *Синтаксис русского языка*, 3-е изд. М., 2001. С. 312
- ⑧井上幸義「ロシア語の数詞と名詞との結合における類像性 (iconicity) の現われ」、上智大学『外国語学部紀要第36号』、上智大学、2001年、100-104頁。
 人間が瞬間的に認識できるものの数（「即座の把握」）はほぼ4個までであり、それを超える数（5個以上）の認識（「数え上げ」）には時間がかかることが視覚心理学的実験で実証されている。「即座の把握」と「数え上げ」の違いは、ローマ数字を含めた古代の数表記法（記数法）にも反映されている。この認知上の違いは、いくつかの言語で数詞と名詞との結合形態に反映されていると考えられる。ロシア語の数詞<5>以上十複数生格名詞という語結合には「数え上げ」という非一体的・非一括的な認識の類像性が現われていると思われる。
- ⑨たとえば、高見健一「日本語の数量詞遊離について – 機能論的分析[上]」、『言語』大修館書店、1998年、Vol. 27、No.1、92頁。
 「学生が私の本を2人しか買わなかった。」のような文は全く自然で適格である、としている。
- ⑩大木充「日本語の遊離数量詞の談話機能について」、『視聴覚外国語研究』第10号、大阪外国語大学、1987年、54-59頁。

引用・参考文献リスト

- 井上幸義「ロシア語の数詞と名詞との結合における類像性 (iconicity) の現われ」、上智大学『外国語学部紀要第 36 号』、上智大学、2001 年
- 大木充「日本語の遊離数量詞の談話機能について」、『視聴覚外国語研究』第 10 号、大阪外国語大学、1987 年
- 柴谷方良・景山太郎・田守育啓『言語の構造—理論と分析—意味・統語篇』、くろしお出版、1982 年
- 高見健一「日本語の数量詞遊離について—機能論的分析 [上]」、『言語』大修館書店、1998 年、Vol. 27、No.1、同 [中] No.2、同 [下] No.3
- Грамматика современного русского литературного языка*. Академия Наук СССР. М.: 1970
- Золотова, Г.А. *Синтаксический словарь - Репертуар элементарных единиц русского синтаксиса*. М., 1988
- Пешковский, А.М. *Русский синтаксис в научном освещении*, 7-е изд. М., 1956
- Русская грамматика*. II. Академия Наук СССР. М., 1980
- Шахматов, А.А. *Синтаксис русского языка*, 3-е изд. М., 2001
- Шелякин, М.А. *Справочник по русской грамматике*. М. 1993
- Яковсон, Р. О. К общему учению о падеже, перевод с немецкого А.А. Холодовича. -В кн.: *Избранные работы*. М., 1985

Анкета

о допустимости употребления некоторых предложений в разговорной речи русского языка

(29. 8. 2003)

Просим Вас оказать нам содействие в проведении настоящего исследования. Ответьте, пожалуйста, на следующие вопросы. При этом поставьте в скобки после каждого вопроса цифры, соответствующие Вашим ответам.

А. Ваш пол: ()

1. мужской 2. женский

Б. Ваш возраст: ()

1. до 19 лет 2. 20–29 лет 3. 30–39 лет 4. 40–49 лет 5. 50–59 лет
6. 60 и более

В. Ваше образование: ()

1. высшее филологическое 2. высшее нефилологическое
3. среднее 4. ниже среднего

Г. Ваше место жительства: ()

1. Москва 2. Санкт-Петербург
3. другой населенный пункт ()

Д. Национальность: ()

1. русский 2. другие ()

Считаете ли Вы допустимыми в разговорной речи нижеприведенные предложения? Поставьте в скобки перед каждым предложением следующие цифры, соответствующие Вашим ответам:

1. Абсолютно не допустимые предложения.
2. Очень сомнительные предложения.
3. Затрудняюсь ответить.
4. Предложения, немного сомнительные, но допустимые.
5. Абсолютно допустимые предложения.

Пример: 10. (5) У него две сестры.

1. () Пассажиров в автобусе четыре.
2. () Пассажиров в автобусе один.
3. () Пассажиров в автобусе только один.
4. () Пассажиров, кроме меня и Ивана, было в автобусе только один.
5. () Пассажиров, кроме меня, было в автобусе только один.
6. () Декораций всего одна.
7. () Нас двое.
8. () Нас два.
9. () Родных у нее три.
10. () Родных у нее – только сестра.
11. () Дач у него две.
12. () Дач у него есть две.
13. () Дач он имеет две.
14. () Пассажиров осталось в автобусе три.
15. () Пассажиров осталось в автобусе всего три.
16. () Пассажира осталось в автобусе три.
17. () Их осталось в автобусе трое.
18. () Их работает здесь три.
19. () Их приехало в Москву трое.
20. () Карандашей она купила два.
21. () Карандашей она купила два, а ручек – три.
22. () Красных карандашей она купила два.
23. () Красных карандаша она купила два.
24. () Этих карандашей она купила два.
25. () Домов он построил два.

26. () Ям он вырыл три.
27. () Дверей мы покрасили две.
28. () Книг он прочитал две.
29. () Пива он выпил три бутылки.
30. () Бутылок пива он выпил три.
31. () Аспирина он принял две таблетки.
32. () Таблеток аспирина он принял две.
33. () Учебных предметов он любил два.
34. () Из учебных предметов он любил два.
35. () Фильмов он вчера смотрел два.
36. () Лодок, плывущих по реке, он видел три.
37. () Границ мы переехали три.
38. () Границ мы переехали через три.
39. () Рублей это стоит три.
40. () Часов она просидела четыре.
41. () Километров мы прошли три.
42. () Килограммов ребенок весит четыре.
43. () Картин украли из этого музея четыре.
44. () Картин он украл из этого музея четыре.
45. (Не зная, сколько яблок осталось в ящике,
() – Яблок осталось... только одно.
46. () Книг он подарил Нине две.

Благодарим Вас за проделанную работу.